

## 平成二十二年度高知県立高知南中学校入学者選抜作文問題

次の文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

足袋をはく冬が来ると、必ずわたしの心の中にいきいきと映し出されてくるおばあさんがある。小学校を出るとすぐ小樽のおばをたよって父母のひざを離れたのだが、当時、わたしの父は定職につけず、その仕事もたまにしかなく、家は非常に貧しかった。

はじめて会ったおばだが「なんで来た」といった冷たい顔をしながらも、それでもわたしを小樽郵便局に世話してくれた。

月給が十四円で、食費としておばが十三円五十銭をとり、残り五十銭の中で頭を刈り、ふる銭に充てなければならぬので、それこそ冬が来てもゴム長どころか、足袋を買う余裕もなかった。

雪の中を素足でびよんびよんはねるようにして局へ通ったもので、夜勤を終えて帰る時の足の冷たさには、何度泣かされたかわからない。なんとかして足袋を……、いつもそのことでいっぱいだった。

郵便局の構内に毎週月水金だけ、大福もちを売りに来るおばあさんがいた。

そのおばあさんは、自転車置き場の横に、箱を並べ、いつも寒そうに首巻きで肩を包み、吹きさらしのからすのように小さく縮こまっていた。

ある日、上役の言いつけで、十銭玉を握ってもちを買いに行った。

おばあさんは大福もちを五つ、袋に入れて、わたしに渡しながら、「五十銭玉だったね？」ときいた。自分が渡したのは十銭玉だったが、その時四十銭あったら足袋が買えるという考えが、いなすまのように頭にひらめいて、思わず「うん。」とうなずいてしまった。

おばあさんは、ちらっとわたしを見た。

そして「ふんばりなさいよ。」と、ぼそつとひとこと言って、わたしの手に十銭玉を四つ握らせてくれた。

わたしは逃げるようにしてその場を去ったのだが、あのおばあさんはわたしがごまかしたのを知っているのだと思うと、いても立ってもいられなかった。正直に言って、その金を返そうと心の中では思うのだが、「四十銭あったら足袋が買える。」という心に負けて、とうとうそれが果たせなかった。

それからはおばあさんの前に立つことはできず、もちを買いにやらせられる時は、必ず同僚にたのんで行ってもらった。

「あの貧しいおばあさんから、金をかすめとった！」という自責の念と、「ふんばりなさいよ。」と語ってくれたのは、わたしにこれで足袋を買ってがんばりなさいよ、と励ましてくれたのだという甘い考えとが日夜小さなわたしの胸を苦しめた。

通信講習所の試験に合格して、そこを終えると、札幌局に配属され、はじめて月給をもらうと、汽車にとび乗るようにして、くだものかごを手にそのおばあさんを小樽局にたずねた。

すでにおばあさんは死んでいた。

局の近くを流れる色内川の橋にもたれて、ただむしように自分に腹がたつてしようがなかった。持っていたくたものかごを川に落としてやった。

浮きつ沈みつ流れて行くかごを見て、わたしは泣けて泣けてどうしようもなかった。

死というものが、こんなに絶対なものかということが、あの時ぐらい強く感じられたことはない。

以後、わたしは、二十何種類の職を転々としたが、なんとか今日まで、くじけずにやり通せたのは、あのおばあさんのちらつとわたしを見たあの時の目、「ふんばりなさいよ。」と言ってくれたあのことばによって、ささえられてきたからだと思う。

今となつては、ただ後悔の念を深くするばかりだ。いや、あのおばあさんが、わたしにくれた心を、今度はわたしがだれかにさしあげなければならないと思っている。

(中江良夫「足袋の季節」より)

※小樽……北海道の地名。

※銭……お金の単位。百銭で一円。

※ゴム長……ゴム長靴。

※同僚……職場の仲間。

※自責の念……自分を責める気持ち。

※通信講習所……電報等について勉強する学校で、卒業後郵便局に勤める。

※札幌……北海道の地名。

※むしように……むやみに。やたらに。

## 問題

文章中の——線部の「わたしにくれた心」から、主人公にはどのような気持ちが生じたか。あなたは考えますか。あなたが自身から送っていききたい中学校生活と結びつけて四字程度で書きなさい。なお、一行目から書き始め、題名や名前は書かないこと。

